

ふにありの元気印

2007年3月刊 発行:地域づくりネットワーク福岡県協議会

報告

第5回福岡県地域おこし研修交流会(八女市)
第23回地域づくり団体全国研修交流会(愛知)

福岡県の「げん木」 シリーズ④ 黒木の犬藤

八女郡黒木町の素戔鳴(すさの)神社の境内にある大藤。樹齢600年。国指定天然記念物。枝張り東西50m、南北80mに及ぶ。後征西將軍、良成親王のお手植え(1395年)とか。毎年美しい花を咲かせ、4月中旬～5月上旬の大藤まつりには毎年、15万人ほどが訪れる。

第5回福岡県地域おこし研修交流会

地域づくりの要は 民と官の真の協働

テーマ イギリスの地域再生運動 **グラウンドワーク** に学ぶ

第5回「福岡県地域おこし研修交流会」が3月9日、八女市の上陽公民館で開かれ、県下の地域づくり団体の代表者を始め、行政関係者など約50人が参加。筑後地区での事例報告を踏まえ、質疑応答や意見交換が行われた。午後は来日したイギリスの地域づくり運動家の貴重な話を聞く機会を得た。なお、この研修交流会は（財）日本グラウンドワーク協会九州・中国・四国ブロック会議との共催。



研修会はまず、筑後地区の事例報告から始まった。ビデオを多く使い、熱心な語り口に郷土愛があふれていた。

大川市は家具の生産地として知られるが、不況で売れ行きが落ち、街は暗いムードに包まれた。「何とか、街の活性化を図ろう」と平成10年に50歳代の者10数人が集い、活動を始めた。初めに取組んだのは外国の家具を勉強し、家具のデザインを変えてみようということだった。平成15年にNPO法人になった。現在、会員は35人。4つの委員会を持ち、①古都をいかす②中心市街地の活性化③ITを学ぶ④筑後川を観光資源にしようなど4分野で活躍している。

続いて同塾の本間雄治理事が関連説明。観光を切り口にした街の活性化ができないだろうか、とあれこれ取組んでいるが、観光と環境保全は密接不可分の関係にあることに気がついた、という。

まず、観光面からの取組みについて。

筑後七川委員会をつくった。「七川」とは筑後川に流入する支流のこと。簡単な写真集やガイドブックをつくって小・中学校に配った。実際に舟で川に出て中流域の中洲を宝島と名付け、子供たちと遊んだりしたが、目につくのは川に浮かぶゴミ。とくに下流域には小さきまざなゴミが散乱している。中には5m×3m位で高さ1mもの、浮島となった巨大ゴミもあり環境悪化の原因となっている。そこで会員たちはゴミ回収船を自前でつくった。フロートの上にバックフォールを乗せ、漁船で引く。資材は会員保有の中古品を持ち寄った。やってみると、ゴミは多く、1日に2トントラックで4台分ほど。おまけにキリがない。撤去・焼却にも経費がかかる。だが、少しずつ、行政や漁協などからの支援の輪が広がってきた。これからだ。

河川環境を良くして観光プランに取組みたい。いずれ久留米から大川まで約18kmに観光船を出したいが、とりあえず10月から下流域の昇開橋を中心に、クルージングと川の近辺の史跡めぐりをセッティングして始める計画だ。

事例報告2 イギリスのグラウンドワーク に学び、地域創造に取組む NPO法人「グラウンドワーク福岡」

大谷妙人事務局長が報告。この組織はもともと福岡県職員の自主研究グループとして平成5年に結成された。行政独自で政策を展開する難しさに直面したからだ。模索するうち、平成7年、（財）日本グラウンドワーク協会が設立され、大いに啓発された。平成12年、現在の「グラウンドワーク福岡」の設立。

運動方針は、イギリスのグラウンドワーク活動（詳しい内容は後半の講演記事を参照）を手本に、誰もが幸せに暮らせる地域社会を築こうと、福岡の地に適し

事例報告1 河川のゴミ回収と 観光プランで地域おこし NPO法人「大川未来塾」

まず、NPO法人「大川未来塾」の阿津坂芳徳理事長が運動の立ち上げと、その後の経過について説明した。



お昼は2時間たっぷり取って昼食交流会。
地元の心づくしの手料理を楽しんだ。

た活動方法を研究し、実践することにある。現在は環境改善、環境教育、福祉、国際交流の4分野を中心に活躍している。事務局は福岡市博多区に置くが、活動エリアは福岡、佐賀、山口の各県に及ぶ。筑後地区での活動も永く、星野村と協働で「平和の森づくりワークショップ」などを行ったほか、矢部川流域連携ワークショップなども実施した。

平成19年4月から、八女市上陽町の5施設（ほたと石橋の館など）の指定管理者として、グラウンドワークの手法を活かして地域再生に取り組む。

グラウンドワーク福岡はイギリス・ウェールズとの交流も深める。平成6年、イギリスを訪れ「グラウンドワーク・マールサ&ロンドン・カノン・タフ」を視察して

以来、相互に交流を重ねて来た。今回、この団体の役員が来日し、このたびの県大会での講演となった。

平成17年にはイギリスから活動家、高校生・教師16人が福岡を訪れ、福岡県立魁誠高校と交流を深めた。同時に、日英共同の「里山活用とグリーンツーリズム」のワークショップを行った。この中で、星野村に広島・原爆の火が燃え続けている「平和の塔」があることから「平和の森づくり」の提案があり、村当局の採択するところとなった。

特別講演

「住民団体と行政による協働の地域再生」 イギリスのグラウンドワークの現状報告

以上のように、グラウンドワーク福岡の活動は多彩だが、これだけではない。「花のジョイントコンサート」▽「子供たちとの自然探検」▽「福岡盲学校の学習支援」▽「不登校児のケアプラン支援」▽「植樹・環境・総合教育の学習支援」など広範囲に及ぶ。

会員は約160人。大学教員、公務員、民間人と顔ぶれは多彩。活動資金は大変だが、そこは「カネがなければ知恵を出せ、知恵がなければ汗流せ」を合言葉にお互いに励ましあって活動が続ける。

まず、グラウンドワーク（以下、GWと略す）について。1980年代初め、

英国・サッチャー政権のもと、財政悪化、高失業率の対策として国策事業による「地域づくり、地域再生」の手法が実施された。それがGWである。グラウンド（生活の場）、ワーク（創造）の意味で、住民・企業・行政の3者のパートナーシップのもとで身近な生活環境（自然環境）を変えていく運動。3者をコーディネートしながら具体的なプランを立て、実践する現地活動団体をGWトラストと呼び、現在、英国全土で53を数える。

今回、来日したのはその一つ、ウェールズ地方で活動する「マールサ&ロンドン・カノン・タフ」の一行3人。炭鉱閉山で疲



マーガレット・H.ボップ氏

GW（マールサ&ロンドン・カノン・タフ）所長。ウェールズ地方のGW活動のリーダー。以前は民間の土木技師として働く。地域と行政の各種委員会に属し国際活動も盛ん。

弊しきった地域（失業率は当初70%）は、20年後の今日、住環境の整備、若者の職業訓練や障害者雇用など幅広い分野で成果をあげ、地域は蘇った。以下、3人の講演要旨である。

まず、マーガレット所長（写真右）は「GWの根本のコンセプトは住民の福祉向上、地域再生」と強調。同氏のトラストには60もの民間の小グループが集う。ポイントにはパートナーシップ。住民、企業、行政の真の協働が不可欠で、ここか



ピーター・クローク氏

イギリス全土の森林を管理する森林委員会の地域政策担当。25年間にわたり環境分野に携わってきた。持続可能な地域再生のためのプログラムを考え、GWとの連携にも熱心。

国有林は国のものか？かつてはそうだったが、1990年代半ばから公務員削減の影響で政策決定権が地方に移譲された。森林は地域の財産である。人々の健康を育み、雇用を創出する。より良き運営・管理のためには行政ではできない創造性が求められる。そこでGWとの連携を図り、良い成果をあげている。



リンヴァ・フィリップス氏

GW（マールサ&ロンドン・カノン・タフ）理事。ウェールズの炭鉱労働者の長女に生まれ、15歳で働き始める。40年以上看護婦を勤める。現在GW以外にも多方面で活躍。大変な親日家で、来日16回目。

私はGWトラストの理事の1人として地域の人々のニーズにあう革新的な事業を起したいと常に考えている。私自身、子供の頃からずっと働いて来た。私は学校で子供たちに「事業は自分で起こせるんだよ」と常に言う。看護婦の経験から障害者の就業・働く場の確保をいつも考えている。貧困との戦いは続く。国際的な連帯も大切である。

テーマ

「人」の元気が「地域」の元気

愛知大会

全国から
四百人集う
第24回地域づくり団体全国研修交流会

今回で24回目の「地域づくり団体全国研修交流会」は昨年11月10～11日、愛知県で開かれ、地域づくりに取組む全国の運動家や団体、行政関係者など約400人が参加。名古屋市内での全体会のあと、県下16会場で分科会。全国各地での数多くの実践報告があり、一泊をはさんで熱心な意見交換。熱い共感と交流の輪が広がった。

第1日は名古屋市のウイルあいち（愛知県女性総合センター）で全体会。まず、主催者を代表して地域づくり団体全国協議会の岡崎昌之会長が挨拶。

「今、日本の地域づくりは市町村合併や財政事情などで大きく変わりつつある。

これからが地域づくりの正念場だ。会場の皆さんは活動の中核を担う人達だ。新しい地域づくりの決意を固めて頂きたいと思う」

続いて地元から愛知県の神田真秋知事が歓迎の挨拶。来賓挨拶として総務省大臣官房、（財）地域活性化センターから祝辞が寄せられた。

このあと、基調講演。講師は中田實氏



愛知大会のユニークなロゴマーク



基調講演をする田中實氏。「安心、安全のまちづくり」に地域づくり活動の大事な任務がある、と説いた。

（愛知江南短期大学学長）。中田氏の専門は地域社会学、コミュニティ論で、現在は地域共同管理、地域分権、住民組織論（市民参加）などを研究している。中田氏は「人が輝く元気な地域づくり」をテーマに語った。以下、講演要旨。

基調講演

「人が輝く元気な地域づくり」

講師 愛知江南短期大学学長

中田實氏

今の時代に求められるもの、つまり地域づくりの背景について考えてみる。ひとつには人類が生み出した価値の対立がある。国際協力か、国際競争か、グローバルイノベーションの中に対立の構造がある。

これから企業は、家庭は、地域はどうなっていくのであろうか。雇用の不安定化とダウンサイジングで病气や自殺が増え、家庭機能の不全化、親が子を虐待するという家庭の崩壊現象が一部に見られる。

地域ではどうか。福祉コミュニティをめぐる、自治体の分権体制、自治体内部の分権と、矛盾と対立が見られる。地域の状況を見てみると、平成17年6月の総理府の社会意識調査では

・地域活性化の活動に参加したい

……67%

・したくない、又はどちらとも言えない

……30%

——という結果であった。

自由な個人が抱える逆説がある。個人の自立化と孤立化。子供たちが孤立化するのか、社会化するか。自分と他人の関係はどうか。人間関係に深入りはせず、自分はいえらと思うているが、その根拠はない。そのような例が多い。

R・D・パットナム著の『孤独なボーリング』（2000年刊）という本は衝動的であった。コミュニティの衰退が民族主義の危機を招く、という内容だが、著者は、社会関係資本の充実が図れば非行、ドラッグ、学校中退、自殺等が少なくなると証明してみせた。ここに地域づくり団体の活躍が大変大きな意味を持つことになる。まさに地域づくりの課題もここにある。

つまり、安心・安全のまちづくり、快適で住みよい環境づくりということだ。個人の問題を地域の問題として、とらえ直してみる。それには想像力が必要だ。個人では解決できない、家庭でも、企業でも、行政でも解決できない問題を、地域問題としてみる。「共感の場」づくり、コミュニティづくり。そこから問題解決の展望がひらけてくると思う。

◆ 基調講演の後、参加者は別れて県下の各分科会会場に向った。

第1分科会報告

「10年先ゆく学習施設」—— 楽田ふれあいセンター「しろやま」
—— 遊び・体験・学び・出会い・スリル・そして感動 ——

会場・犬山市

愛知県の北西部、岐阜県に接する犬山市は国宝・犬山城で有名だが、今、全国の地域づくり運動の関係者が注目するのが楽田ふれあいセンター「しろやま」で取組まれている公民館活動。愛知県や国から表彰を受け、国連からの視察団も訪れるなど評価は高い。

犬山市の楽田（がくでん）地区は人口1万3000人、世帯数4500戸。農業中心の田園地帯で最近名古屋への通勤族、いわゆる新住民が増えて来た。

楽田地区コミュニティ推進協議会（勝野弘平会長）は市が公民館設計計画を進めていることを知り、市と何度も協議。市側も理解を示し、最後はワークショップによる住民主導のかたちで建設内容を決めた。最大のねらいは住民同士のコミュニティづくりである。



楽田ふれあいセンター「しろやま」の外観。夜は遅くまで電気が灯り、不夜城のようだ。もちろん、利用者がいるからだ。



視察する第1分科会の参加者たち。和室のそばに立派な炉がきあってあり、感嘆しきり。

新公民館は平成13年4月にオープン。

楽田ふれあいセンター「しろやま」と命名された。4000㎡の敷地に鉄筋コンクリート2階建て、建築延面積1500㎡。総工費8億2600万円。

この施設が注目されるのは建物が立派だから、ではない。住民本位の運営、つまりソフト面が充実しているからである。

**民間が施設を管理・運営
365日、24時間使用もOK!**

毎月、市側と同協議会が話しあうが、施設の管理・運営は同協議会に委ねられている。管理人13人も同協議会で募集、採用した。

さて、最も使い勝手を良くするために使用時間制限を「撤廃」した。つまり、365日、しかも1日24時間使用がOKで

ある。ふだんでも夜中の12時頃までの利用はザラで、会社員や働く女性の姿も多い。こんな公的施設が、全国広しといえども一体あるだろうか？

部屋や設備は陶芸、料理、音楽、スポ



夜は8時過ぎ、男女メンバーがバレーを楽しんでいた。一汗かくとシャワー室もある。

第7分科会報告

「地産地消」を合言葉に

「食・農・健康」の地域づくり

会場・豊明市

豊明市では平成11年度から生ゴミ推肥化事業をスタートさせ、肥料リサイクルセンターを整備した。

行政だけではなく、NPOや町内会などの地域団体が生ゴミ回収を推肥の宣伝等、普及活動の部分を担当しており、行政と住民が協力し、地域が一体となって生ゴミを回収し、それを肥料として各家庭や農家に還元し、農作物を育てる「地産地消」の仕組みづくりに取組んでいる。

「けやきの会」の紹介があった。この

ーツ等用途に応じてバラエティに富み、特に親子連れなど子供の居場所を確保した。「子供は地域が育てる」。それこそ老若男女がのびのびと利用していた。

夏祭り、火遊び教室、クリスマス会、やどかり塾（昔の山の講）、ふれあいコンサート、ゴミゼロ運動、青色防犯パトロール。ここをステーションにイベントは多い。まさに「10年先ゆく学習施設」だ。犬山市当局の理解ももちろんだが、同協議会の情熱が実現に導いた。役員50人の平均年齢は50代。とにかく和気あいあい、笑い声の絶えない仲間集団だ。このチームワークが新たなエネルギーを生む。

次回大会は 茨城県で開催

会は誰もが安心して暮らせる地域づくりをめざし、地域に根ざした助けあい活動に取組んでいる団体である。

主な活動は、ふれあいミニデイサービスで、自立支援訓練や、地域の食材を使った食事の提供など、地域のお年寄りを自分たちで助ける活動を実施している。また、会で使う野菜の一部は、JAや行政の協力で、農家の指導を受けながら自分たちで栽培している。まさに地域一体の取組みであった。

筑後の豊かな食文化を知ろう!

筑後ネットワーク田園都市圏構想リーディングプロジェクト

大盛況 筑後スローフードフェスタ'06(2006年10月~11月)開催

筑後地域は、田園風景に代表される美しい自然と、筑後平野・筑後川・有明海に育まれた食材に恵まれ、豊かな「食文化」が传承されています。

「筑後スローフードフェスタ」は筑後の食文化をテーマに、美しい景観、伝統・生活文化、伝統産業などの地域資源を活用し、福岡県と市町村が協働して行うイベントで、筑後地域の「食」に関する体験と地元の人との交流を通じ、筑後のよさを知ってもらおうというものです。

また、この活動により、食文化だけではなく幅広く地域の個性や魅力が伝わり、人が交わることで新たな交流機会や文化活動が生まれ、今後さらに筑後地域を活性化させようとするものです。



子供も一緒にこんにくづくり
(山川町)

地域イベント

10月、11月の2ヶ月間、筑後の各市町村では「食」に関する様々なイベントが開催されました。

実施に当たっては、食育に取り組む団体や地域づくりの活動団体が連携し、それぞれ趣向を凝らしたイベントが行われました。

地域では地元の食を見直す気運も盛り上がり、各団体間の情報交換や地元グループの活動にも広がりが出ています。



地元の食材を使った料理バイキング(小郡市)



だご汁づくりに挑戦(黒木町)



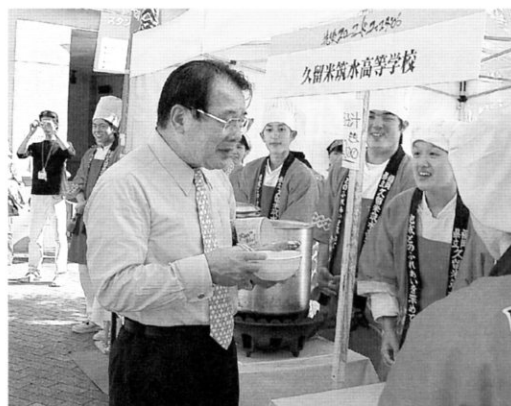
おいしいごはん(立花町)



大牟田はかすてら饅頭発祥の地(大牟田市)

シンボルイベント

10月14・15日、久留米市で開催されたシンボルイベントでは、筑後の郷土料理や、フランス料理のシェフによる筑後の旬の食材を使った新しいメニューの料理がふるまわれたほか、食育や筑後の食文化に関するシンポジウムなどが開催されました。



イベント会場では麻生知事も舌鼓

全国的にも、地域の食材や郷土の伝統料理・家庭料理を見直し、地域の食文化を守るスローフードや地産地消、食の安全・安心、食育など、食への関心が高まりを見せています。

「筑後スローフードフェスタ」は、筑後地域の良さを広めると同時に、皆さんに地域資源、食文化を見直す機会となってもらいたい、という取り組みでもあります。

今年も開催いたしますので、皆さんぜひご参加ください

「農業女性の地位向上を図り、農業女性が誇りと充実感をもって農業に取組むことを目指そう」と、前原市農業女性の会「つばさ」が結成されたのは平成7年4月。女性農村アドバイザー、OB及びJA女性部役員等で委員会をつくり前原市や普及センターJAの協力を得ながら、さまざまな事業を展開して来た。

今年で13年目。この2月10日、合同講演会「農力フォーラム」前原の農力をみんなが高めよう」は伊都文化会館大ホールで開かれ約550人が参加。九州大学農学部教官3人など5人のパネラーなどによる講演会、パネルディスカッション、イチゴなど農産品が当たる抽選会と大変な盛況であった。

そのような様子を見ながら、現在の5代目会長、松吉とよこさんは感無量。この13年間の思い出が走馬灯のように脳裏をよぎった。食と農、男女共同参画社会の推進などを柱に研修会、講演会、異業種団体の交流会、先進地視察など、さまざまな活動を行って来た。「わいわいトーク」「暮らしやすい農村にしたかね」▽「いとくのくに収穫祭」など、肩のこらない楽しいイベントの一方、まじめで堅いテーマにも挑戦した。九州大学教授を講師に「新農業基本法について」を勉強

農業女性の誇りと自信づくり

前原市 農業女性の会『つばさ』

した（平成12年7月）。普段、学ぶ機会の少ない法律について学んだことは、とても刺激になった。また、「市長との懇談会」（平成14年8月）は行政トップと農業について意見交換する初めての機会でもあり、普段、あまり気にかけない行政が身近なものに思えた。

「つばさ」がこれから取組むべき課題は多い。まず、最近よく言われる「食育」。子供たちに教えるだけでなく、親も一緒に考えたい。それから、農業者と消費者との交流▽地産地消▽男女共同参画意識のさらなる推進など。



現在の5代目会長、松吉とよこさん。いちご農家で出荷に忙しい中、会の将来について熱く話してくれた。

当面、「つばさ」が関心を深めているのが「家族経営協定」の締結。これは、農家の家族一人ひとりが、意欲をもって農業経営をやるために、経営方針や家



会報「つばさ」。A4判4頁。年2回発行。毎号、キメ細かい情報をのせ、15号を数えた。JA各支店を通じて全農家2258戸に配布される。

族一人ひとりの役割を定め、働きやすい環境を整備するもので、家族内の話し合いから始め、最後は第三者の立ち合いのもと、文書にしてまとめる段階に至る必要がある。「家族なのに、なんでそこまで？」と否定的な見方もあるが、次第に広がりを見せて来た。

新しい農村の生活スタイルと言ってもよいだろう。もうひとつ。「つばさ」では前原市で初めての女性農業委員を誕生させようと取組む。昨年の選挙では惜しくも落選したが「今度こそ」と意中の立候補予定者を盛り立てる。「つばさ」には明日がある。

団体概要

- 代表 松吉とよこ
- 事務局 前原市役所農政課内
〒819-1192前原市前原1-1
☎092(323)1111(内)1620
- 設立 平成7年4月
- 会員 役員23人
一般約2200人

筑豊の石炭シンポジウム

観光・教育・まちおこしを語る 予想を上回る大盛況

2月24日、飯塚市の近畿大学産業理工学部で「石炭文化遺産を未来につなぐシンポジウム」観光・教育・まちおこし」が開催された。主催、住学協同機構「筑豊地域づくりセンター」・「筑豊ゼミ」。

まず「『遊学アイランド九州』形成に向けた産業資源連携方策策定調査」の報告のあと、2つの基調講演「産業考古学からみた筑豊の近代化遺産」と「筑豊石炭産業の盛衰と産業文化遺産による観光、まちおこし」があった。

このあとパネルディスカッション。パネリストに田川市石炭・歴史博物館▽直方市石炭記念館▽宮若市石炭記念館▽飯塚市歴史資料館の館長らが顔を揃え熱心な意見討論が繰広げられた。

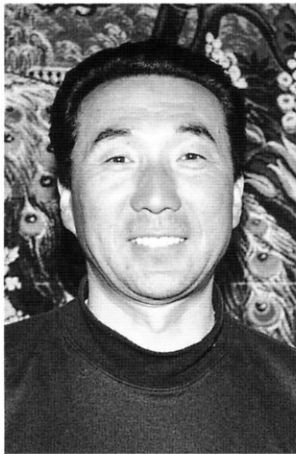
当日は予想をはるかに上回る261人の参加者があり、会場からの発言も活発で大盛況であった。

筑豊の4つの石炭記念館が一堂に会する機会は滅多にないことだけに、石炭に関するいろいろな捉え方の違いが浮彫りにされ、参加者の関心を高めた。このことは筑豊の石炭遺産、産業遺産、文化遺産の保存の動きに今後、一層寄与するものと思われ、有意義なシンポジウムとなった。また、シンポジウム終了後の交流会も大いに盛り上がった。

こんにちは

地域づくり団体訪問 シリーズ(20)

ひと模様



野村 勝浩さん (46)

「スローフード協会 筑後平野」会長

スローフード運動で 豊かな地域づくりめざす

スローフードとは？「食事に
らいゆつくりとろう」と、忙し
い現代人の食生活を見直す動きで、
イタリアが発祥の地。アメリカ
系ファストフードに対し、ファ
スト（早い）の反対語スロー（ゆ
っくり）をテーマに運動し、日
本でも静かに、着実に広がりを
見せている。

野村さんはスローフード協会
筑後平野（正式にはスローフー
ド協会日本支部筑後地区支部）

の会長。平成16年10月の結成以来、
地域の食材や郷土料理の見直し、
生産者―料理人―消費者を結ぶ
ネットワークをつくることを目
的に、さまざまな活動を展開し
ている。

主な活動方針は①筑後地区の消えつつあ
る郷土料理を守る②質の高い素材を提供す
る生産者を守る③子供たちを含め、消費者
に食文化を啓発するの3点。具体的には
旬の野菜や果物の収穫体験▽旬の素材を使
った調理や試食会▽田植え体験▽食育に関
する講座やシンポジウムなどで、1ヵ月
1回のペースで実施している。特に子供た
ちの「食育」には配慮する。

野村さんはJA指導員を6年間、その後、
米、麦、大豆、露地野菜（ブロッコリー、
レタス、ホーレンソウ）を手掛ける專業農

家として20年間やって来た。3年前、スロ
ーフード運動との出会い。「これだと思っ
た」。JA活動のかたわら、行政（久留米
市）の委員会にも農業代表委員として積極
的に参加して地産地消に取り組んで来た。

「私はスローフードに加えて、スローラ
イフ、スロースティというのですよ。ゆた
いと過ごしましょうという意味で、何か
思いやりやあたたかみを感じられるではな
いですか」▽「本来、農業は楽しいもので
すよ」。自然に顔がほころんだ。昨年10
月、筑後地区で催された福岡県主催の「筑
後スローフードフェスタ'06」（本紙5頁参照）
では大役を果たした。1男2女の父。

連絡先

スローフード協会筑後平野事務局
（くるめすたいる内）
☎0942(37)1439

地域づくりコーディネーターの目

その②②

岡本顕實

今年度の福岡県地域おこし研修交流会
は異例の開催内容となった。イギリス版
「地域づくり運動」の「グラウンドワー
ク」の取組みを、永年、運動に携わって
来た3人の方から直接聞くことが出来た
ことは大変参考になった。詳しくは本紙
1・2頁を見て頂きたいが、紙面の都合
上、記事に盛り込めなかった含著ある言
葉をここに記しておきたい。

グラウンドワークの関係者は盛んに「環
境保護」という言葉を口にしたが、この
環境とは単に自然環境を指すのではなく、
4つの「P」の視点があるのだという。
まず「People」（人々）である。次が

「Place」（安全な生活環境）で、3番目
が「Prosperity」、4番目が「Partnership」
である由。3番目は繁栄の意で、自ら収
益事業も手掛け、この21年間で94億円の
収益を得たそうだ。その資金力で新たな
運動を起す。4番目は、他団体との、あ
るいは企業や行政との協働、役割分担と
いった意味。これら4つの「P」が相ま
つてこそ運動の前進と着実な成果がもた
らされた、という。

グラウンドワークのスケールの大きさ
には目を見張るばかりである。住民、企
業、行政の協働の成果というが、さて、
日本ではまだまだ克服すべき課題が多い。

お知らせ

平成18年度 地域づくりコーディネーター研修会

全国の地域づくりコーディネ
ーターが一堂に会して地域
づくり運動の発展と推進を話
しあう研修会が昨年8月22
日、東京で開かれた（主催・
地域づくり団体全国協議会）。
福岡県を始め、全国から66人
が参加。「地域経営と組織マネ
ージメント」のテーマで2分
科会に分かれ、全国各地での
事例報告を踏まえ、パネルデ
ィスカッション。2日間にわ
たり真剣な討議が交わされた。

地域づくりネットワーク福岡県協議会から

協議会では、県内各地
で展開されている地域づ
くり団体の活性化を図る
ため、協議会が委嘱する
地域づくりコーディネ
ーターを派遣する事業や、
団体間の情報交換・交流
の支援事業を実施してい
ます。是非ご活用ください。
会員の皆様の紹介や協
議会の事業内容などは、
協議会のホームページに
も掲載しています。

発行

地域づくりネットワーク福岡県協議会
〒812-8577 福岡市博多区東公園7-7 福岡県庁 地域政策課内
TEL.092-651-1111(代表) FAX.092-643-3164
http://www.chiikinet-fuku.org